

## 東京天文台時代の水野良平氏

虎尾正久

水野良平氏の訃報に接して暗然となった。ここ数年間は行きがちがお会いする機会が全くなかったが、あの独特の温顔には渋谷のプラネタリウムに行けばいつでもお目にかかると云う気持ちでいたのに。

私が昭和8年、始めて東京天文台に入台することになってお世話になったのは、当時タイム部屋と云われた時刻の観測、保守、報時を実践する大部屋で、その中に水野さんがおられた。水野さんの御名前はすでに中学生時代から当時のポピュラー天文雑誌の上で、同じ天文台の小川清彦氏などと共に存じ上げていたので、その大先生と机を並らべることになって、何とも名状し難い気持ちになったことを覚えている。

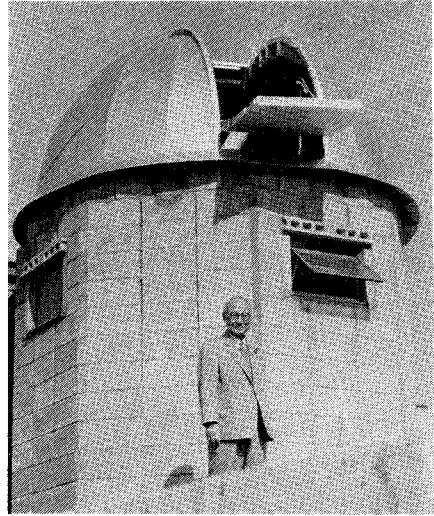
ところが、その水野さんは極めて温厚な、いかなるときにも満面笑みを湛えておられる近づき易い方であって、それをいいことに、大学の講義では殆んど触れられなかった“時”に関するあらゆる知識、技術を手を取り足を取って教えて載いたものである。

それ以来、私にとって水野さんは時にはよき先輩として、また時には大変出過ぎた云い方ではあるが、よき親友として永く交渉がつづいたのである。

水野さんは熱心なクリスチャンであったが、決してそれらしい固苦しいところはなく、また東京天文台の職員の子供達を集めての幼稚園の園長さんであったが、まことにそれにふさわしいお人柄でもあった、何しろ永い交際の間一度も水野さんが怒ったり、人を叱ったりするのを見たことがなかった。

水野さんの趣味の一つにサイクリングが挙げられる。時には、2、3人で、時には集団を率いて盛んに東京近郊を遠乗りされた。私もよくその仲間に入れて載いてあとについて走ったものである。サイクリングと云っても現代のように何段もの切替えギア付きの軽快な自転車ではなく、無骨な重い実用車ただ一種しかない時代で、また殆んどの道路が、国道と云えども舗装されていない頃の話である。従ってパンク修理の道具一式を携帯しての難行苦行でもあった。それが次第に病が高じてくと自転車を担いでの登山と発展し、高尾山を振り出しに、奥多摩の山々や道志の山々へ泊りがけで担ぎ上げると云うこともあった。

後年このサイクリング熱がとんでもないことに役立つことにもなった。戦争の様相が厳しくなって来た昭和19年頃から疎開が重大問題となったが、水野さんは縁故を頼りに私もお伴して栃木県の鹿沼まで自転車を駆った



り、高崎まで足を延ばして一泊し、長駆榛名山麓の寒村まで入り込んだこともあった。このときは驚いたことに、こんな山深い村まですでに軍の手が入りこんでいて目ぼしい施設はすべて占められており、ある農家の大きな養蚕小屋を借り受けることにして仮の契約を結んで帰ったが、結局この疎開は実現しなかった。

さて私は昭和16年「国際報時所」に移籍された。ここは東京天文台の一隅に小さい庁舎を持つ文部省直属の官庁で、国際報時の受信を専門に行っているところで、この時点で私は水野さんの傍を離れたのだが、実際には依然として水野さんと共に時の観測をつづけた。

昭和16年の暮に始まった太平洋戦争の戦況が次第に悪化してくると共に水野さんの大変な御苦労が始まる。当時陸海軍共に無線報時は一日も欠かさぬ様に云う強い要請をして来ており、そのため報時施設の予備を、あるいは疎開をと云う問題が早くから起っていた。まず早々に三鷹に近い田無の東大農場内に予備施設を設けることになり、観測小屋まで造ったが、この設備は後に爆弾の直撃を受けて壊滅してしまった。

昭和19年始めから、当時の台長関口鯉吉先生が永く気象台関係を歩いて来られた縁故で神戸の海洋気象台に予備施設をおくことになり、水野さんはその完成、維持に専念された。常時観測者と報時係とが交代で駐在し、いざと云うときは気象無線の路線を使って送信局に結ぶ計画であった。何しろ東海道の旅も今では想像もつかない苦労の種の時代であったが水野さんは愚痴もこぼさず実に頻りに往復されたのである。

ところがこの施設は東京天文台の火災の直後、焼夷弾攻撃を受けて完全に烏有に帰してしまった。

さて昭和20年2月8日、東京天文台が皮肉にも火災によって全焼してしまった。私の記憶に誤りがなければ、その日水野さんは神戸におられた。ところで、その朝早くまだ余燼のくすぶっている中で、台長や福見先生、辻先生などとの話合いの結果、報時室を国際報時所の中に急設して三鷹からの報時をつづけることになって、水野さんは急いで帰京され、懸命の設備づくりが始まった。それ以後再び私は水野さんと机を並べることになったのである。

やがて神戸も失ない、報時の予備施設を水沢の緯度観測所にもお願いすることになった。その上近県にも疎開先を探がすべく、前記の自転車での適地探しになった訳である。最後には信州松代への疎開の話が持ち上がり、具体化する直前に終戦となり、困難な戦後を迎えることになった。

無線の送信局はすべて軍の管理下にあったもので、従って終戦と共に報時も杜絶してしまった。これを何とか復興するために水野さんのこの頃の御苦心は大変なものだったと思う。

そうして次に来たものが「分秒報時」であった。戦後国際的な眼が開られると、アメリカではすでに昼夜無休で毎秒を知らせる連続報時が実施されていた。これを日本でも行なおうと云う計画である。場所は天文台の焼け跡に残った地下時計室、ここにあり合せの機材あれこれを集めて連続報時の装置を作ろうと云うのである。何しろ誰しも喰うや喰わずの状態であったし、連日水野さんを先頭に報時の係の人達の辛労は大変なものであっ

た。

「分秒報時」は昭和23年5月の礼文島日食を期に実現を見たし、同じ年その地下室を取り囲んで庁舎も出来上がり、水野さんも私もこの真新しい部屋に移ったのである。

それから間もなく、昭和25年3月突如として水野さんは辞職されたのである。天文をこよなく愛し、今の仕事を天職のように云っておられた水野さんが止められるとは全く思いもかけない出来事であった。そこで水野さんの御気持ちを伺ったところ、唯一と言「もうミリ・秒コンドにほとんど疲れたのでネェ」と洩らされた。これが多分御本心だったのであろう。当時劣っていたわが国の時の精度を欧米のそれに追いつけ、追い越せと云うのが私達に課せられた命題で、事ある毎に「ミリ・秒コンド」と云う言葉を聞かされ、またわれわれも口にしてきたからである。事実この頃から東京天文台にも水晶時計の導入や写真天頂筒の建造の計画が着々と進められていて、リーフラー振子時計と子午儀の時代からの大きな転換期を迎えようとしている時期であった。

こうしてこの肝心なときに水野さんは横須賀学園で教鞭をとられることになって、私達の前から去られた。しかし間もなくプラネタリウムに勤務されることになって、再び天文学界に立ち戻られたのである。日本天文学会の講演会には必ず出席されるようになった。

私は水野さん御自身にはとても親しくして載いたが、御家庭については殆んど存じ上げなかった。しかし御奥様も3人の御子様もお元氣のようで、さぞ水野さんは御満足であられたことと思う。

御冥福を心から御祈りする次第である。

## 五島プラネタリウムでの水野良平先生の思い出

小林悦子

この夏は例年のない暑さでした。私どものプラネタリウムはいつもの夏休み通りのにぎわいでしたが、それももうすぐ終ろうというとき、突然、水野良平先生ご逝去の報に接し、しばし茫然といたしました。ついこの5月に2度ほど元気なお姿をお見せになったばかりですので、やはりこの猛暑がお体にさわられたのでしょうか。

水野先生は私どものプラネタリウムが、1957年4月に開館して以来、1974年に退職されるまで、学芸課長として、また天文の大先輩として、私たち後進を指導されるとともに、ずつとプラネタリウムの解説をされていらっしゃいました。長い間ごいっしょに仕事をしてまいりました者のひとりとして、プラネタリウムでの先生のプロ

フィールをご紹介します。追悼に代えたいと存じます。

水野先生の解説の特長は、独得の話術で、ファンも多かったようです。星さえ丸天井に映っていれば、補助投影機は不要なくらい——いや星だっなくてもよかったかも知れません。お若い頃から日曜学校や童話会でお話をされてこれ、その豊かな経験ゆえに、当然といえば当然と申せましょう。しかし他の解説者には、その真似は全くすすめられず、反対に、それぞれ個性的な解説がよいとされ、各自の自主性を重んじられて、何もおっしゃいませんでした。

先生ご自身もお話をするのが非常に好きで、少しぐらのお体の具合が悪い場合でも「解説すればなおって